

市民の手で文化の見えるまちづくり

姫路文連 ニュース

季刊 2011年 秋号

編集・発行

姫路地方文化団体連合協議会
(姫路文連)事務局

〒670-0935

姫路市北条口3丁目5

みどりビル1F (姫路労音内)

姫路地方文化団体連合協議会会報(第35号)



「幸福の王子」オスカー・ワイルド (1851~1900)
建石修志 画

「ああ、かみさま、これでじゅうぶんでございます。」
フランダースの犬の主人公ネロが、ずっと見たかったルーベンスの絵を目の
あたりにして、さいごのさいごに希いがかなった時の言葉である。
ネロは至福の中で納得して命の終わりを迎えた。
幸福の王子とつばめも、やはり自らの命の締めくくりを納得して至福の中で
迎えたんだと。
大人になって読み返したい本がある。

茶座「いま・はりま」 第1回「ひめじのまちを元気にしよう！」



6月7日、6年目となる茶座「いま・はりま」が開講。第1回は、姫路市商店街連合会会長で、ぼうしや薬局代表取締役の松岡淳郎さんを講師にお招きした。主な話題は姫路駅とその北側周辺の再開発。行政側が最初に提起した案があまりにも車偏重のものであったため、市民の側として車を制限し歩行者にとって魅力ある街にする対案を練ってぶつけたところ、行政側もそれにほぼ応じるかたちの修正案を出してきたという経緯を事例に、まちづくりにおける行政と市民のかかわり方について、また、いかにして姫路をより魅力のあるまちにするかについて、多くの示唆をあたえられた。

第2回「天守閣の妖怪—姫路の守り神—」



7月5日、茶座「いま・はりま」第2回は、播磨学研究所研究員の埴岡真弓さんをお招きし、姫路城の妖怪として広く知られた「おさかべ」についてお話しいただいた。現在、天守閣の最上階に祀られている刑部神社の祭神はもともと姫山の地主神。羽柴秀吉の築城時に総社の位置に移されたが、池田輝政による再築城のとき怪異があつてふたたび城内に祀られといういきさつや、「おさかべ」と同一視される富姫、ミュージカル「姫山物語」のヒロインが奈良時代末の皇族の落胤であることなど、興味深い考察が披露された。

千田草介

「会津の酒は美味しいなあ」

まだまだ残暑厳しき長月の25日午後7時、「酒宇宙 會津若松雑華」（東日本大震災からの復興を願って、元千石茶屋のご主人が開いた、會津若松の銘酒が手頃な値段で飲めるナイスなお店）に次々と集いし怪しき面々、一癖も二癖もありそうな、年齢、職業不詳の男女たち・・・。

「これはこれは、神戸新聞の皆さんじゃありませんか！」

「そう言う皆さんは姫路文連のお歴々ではありませんか！」

毎年恒例となった姫路文連と神戸新聞姫路支社との懇親会。支社からは、山崎支社長はじめ6名の精鋭記者が参加、姫路文連からは老若硬軟取り混ぜ25名が参加。

イラチが多いせいか、即宴会モードに突入だ！ 自己紹介では音楽ネタ、芸術ネタ、そして紳助引退ネタから何と新聞記者に対してオフレコネタまで（笑）、いつも通りのビビンバ（混ぜこぜ）宴会～。

しかし流石に小坂会長、酔っていても肝心なことは言い忘れない。「神戸新聞社に後援を頂いている東日本大震災復興支援文化展“文連”を成功させましょう！」

そう、それさえ言えば会長の役目は終わり。あとは酔い潰れて寝ていても大丈夫（笑）

新鮮な魚料理に舌鼓を打ち、美味しい会津の酒を煽るうちに、テーブルの各所では文化が語られ、愛が語られて？素晴らしい懇親の場となったようで・・・。

今回欠席した方は、次回にはぜひ参加を。飲みましょう、食いましょう、語り合いましょう、そしてみんな仲良くなりましょうよ。

加茂田陽一

さばいでー ルアンパバーンだより

堀澤 光栄

姫路文連のみなさま ご無沙汰しております。2年前までは文連の飲み会の常連としてあちらこちらに出没していた姫路在住時代を懐かしく思い出しております。さて、初めての海外生活をラオスのルアンパバーンというところで暮らし始めて早、半年になります。この辺のことをインタビューに答えてお話させていただきます。

なぜラオスなんかに？ 昨年、姫路市の美術工芸館を最後に姫路市を離れ、家のある富士山のおもとに戻りました。まだまだ、自分の知識と経験を生かしたいと考えていましたが、たまたま募集していた JICA のシニア海外ボランティアにルアンパバーン国立博物館で「写真・ネガ保存」という要請があり応募しました。3 カ月近い研修所での訓練を受け、今年1月6日に赴任しました。



ラオスはどんな国ですか。 メコン川沿いに中国、ミャンマー、ベトナム、タイ、カンボジアに囲まれた海のない内陸国です。人口の600万人ほど、人口も少なくほとんど産業のない農業国です。そのため GDP 世界130位前後の世界の最貧国となっており、日本は1965年最初に JICA の青年海外協力隊を派遣した5か国のうちの一つです。正式名「ラオス人民民主共和国」という社会主義体制の国です。

博物館でどんな活動をしているのですか。 博物館は1975年に王政が廃止されるまで、ルアンパバーン王国の王宮でした。フランスの保護領下で形だけの王政が続いていましたが、1909年時のシーサワン・ウォン王のために建てられ、その後後継のシサワン・ワッタナーが最後の王となりました。王政が廃止になると翌年に王宮は博物館として公開されました。王の生活、家具、仏像、考古出土品、宝飾、衣装類など数十万点が保管されています。私は特に手つかずの写真、ネガ、ポストカード、切手、札など5万点を超える資料の整理とデータベース化に取り組んでいます。



ルアンパバーンの暮らしはいかがですか。 この町は姫路城と同じ1995年に、やはりラオス最初の世界遺産に登録された街なので私には深い因縁を感じます。小乗仏教が根付いており人々の暮らしは質素ながら、性格は穏やかで人懐こく、けんかや争いを見たことはありません。

日本のひと昔に前に帰ったような懐かしさを覚える街であり、のんびりと時間が流れるいつまでいても飽きない最高の癒しの街です。ただ、この街にないもの、信号、エレベーター、コンビニ、スーパー、海産物・・・文明に慣れた日本人には不便は覚悟しなければなりません。



文連の皆さんにひとこと

日本は東日本大震災の後、電力不足など様々な苦労がおありのこととお察し申し上げます。3月以降、ラオスの観光地ルアンパバーンでも、日本人を見かけることがめっきり減ったような感じがします。ぜひ未知の国ラオスにお出かけください。私の任期は来年末までとなっていますので、この間でしたら博物館をご案内できると思います。来年は国を挙げた「ビジット・ラオス年」でもあります。皆様に再会できることを楽しみにしております。コブチャイ ライライ！

(ラオス・ルアンパバーン国立博物館 シニア海外ボランティア)

*「ブログ南の国のミュージアム」<http://czb12447.blog.fc2.com/>

～故人を偲んで～

瓢千うめ師を偲んで

はりま日本舞踊一の会
花柳芳千歳



お師匠さん 今どうしていらっしゃるでしょうか？蓮華の上で作曲をなさっているのでしょうか・・・

今年2月 小唄の演奏家 瓢千うめ師匠は永眠なさいました。まだ お師匠さんの糸唄声が聞こえてくるような気がいたします。唄の口跡の鮮明さ 色っぽさ また男っぽい匂いのする芸風が私は大好きでした。

お稽古をして頂いたり 食事をしたり そうそう作品の中に”風の盆”というのがありますが 何年も前に一緒に八尾村にゆき 夜通し踊った時に生まれた作品です。その”風の盆”に振りをつけ 私の会で演奏して頂いて踊りました。

日本の伝統芸を生業とし ひたすらご自分の芸を厳しく探求なさる至誠・・・こういう種の師匠を今後望むことは不可能と思います。

私が日本舞踊において師事してきた師匠と同じく「お師匠さん」らしい方は最後となりました。惜しくて 残念で 淋しい限りです。

現代の方には中々理解し難い方であったと思いますが お人柄も良く こういう方が本当の師匠だったと思います。昔気質の師匠でありましたが また一方 愉快で おちやめで 進歩的な物の見方や考えは充分お持ちで 私は目を見はったり 嬉しくなったり ご一緒させて頂いている時間 退屈したことがありませんでした。

私のような者にも「お師匠さん」などと呼んで下さって「ほんとうに気が合うんだね!! 嬉しいよ!! 」と言って頂き まことに厚かましく面白いお付き合いをさせて頂きました。

小唄の各流派家元様が一同に集う東京華せい会のメンバーで そこにおいても次々と新曲を発表され 注目を浴びてこられました。そして お師匠さんの作品を多くの皆様に愛され 使って下さることをとても喜んでおられました。

とかく難しい芸界ですがお師匠さんの芸に対する大らかさ 天晴れなことは天下一品でした。ほんとに素敵なお方でした。もっともっと学び続けたい気持ちですが どうぞお師匠さん見守っててくださいませ。

ご冥福をお祈り申し上げます。

故・伊藤義郎兄を偲んで

坂 東 大 蔵



伊藤さんに初めてお目にかかったのは故・坂東三代作師に入門して間もない十九才の時。綿町交番所の北筋向い、鯉書房の二階の稽古場で師匠から紹介されました。伊藤さんと私の共通の友人、酒量もほぼ同じ趣味嗜好も同じ傾向の中川清すなわち桂米朝さんと三人の交友がいつともなく始まりました。私が大人の入り口に立った青春の、それは懐かしく心ときめく思い出の一齣です。お酒が程よく回ってきますと、しばしば歌舞伎の声色の競演となり、米朝さんの弁慶、伊藤さんの富樫で『勧進帳』。丁々発止のやりとりで大変な緊迫感、役者顔負けの名調子に、ただただ感服したものでした。伊藤さんは十五代市村羽左衛門の声色が得意で『助六』『切られ与三郎』など数え切れないほど拝聴しております。

「お釈迦様でも気がつくめえ」

この名ゼリフをもう聴くことが出来ません。残念です。寂しいです。文連の懇親会の席上でも時たま披露されたので聴かれた方もあるでしょう。

三十数年前頃から年の暮れには伊藤家で奥様をまじえて三人の忘年会。十年前に奥様が亡くなられてからは二人だけのしめやかな会でしたが、二年前から中野信吉君と千田草介君が参加して賑やかになりました。見かけによらず小まめな方で、お手製の関東煮や茶碗蒸しがおおいかったこと。毎回私が下手な若松を活けますと、「松が立った」と殊のほか大喜びされた嬉しそうな顔を忘れることが出来ません。もう忘年会に何うことも若松を活けに行くこともなくなりました。

いつぞや洒落っ気たっぷりで「私は坂東大蔵の大久保彦左衛門です」と大見得を切られたことがありました。まさにその通り！ 心やさしく毅然として正鵠を射たご意見番でした。私が右往左往することなく曲がりなりにも舞踊の正道を歩むことが出来たのも、折に触れて脇め手からのさり気ない含蓄のあるご意見あればこそです。

四、五年前のこと、ご長男の滋氏にお目にかかった時、「父がね、大蔵君がいるので人生が楽しいです、と言っていましたよ」と。私は返す言葉がありませんでした。

独自の人生観を持ちシャイで筋を通された粹人の伊藤さん。いついつまでも天上からご教示、叱咤して下さい。あなたと約束した生涯現役を貫くことが私の使命、ご恩返しだと思い、今後精進を続けます。享年九十二才。

川口汐子さんを偲んで

雪山さんて、ぴったり

市川 宏 三



“創作／子どもの文学”と銘打った川口汐子『二つのハーモニカ』が出版されたのは1973年7月のこと。これが神山征二郎監督によって映画化されたのは刊行3年後であった。神戸にあった映画センターから上映運動協力のよびかけが来た。映画はタシケントのアジア・アフリカ映画祭で平和委員会賞を受賞。そんなこともあって何度も上映されている。

汐子さんは1924年、ドイツ文学者だった父・雪山俊夫の岡山赴任中、次女として生まれた。まもなく父が京都に転任したので女学生までを京都で過ごす。汐子さんに文学の影響を与えたのは次兄廣正。この文学青年も時代の子で河上肇教授で知られた京大経済学部に入学する。この廣正は姫路文学人会議2代目会長だった玉岡松一郎と同窓だった。だから汐子さんを妹のような言い方で誉めそやしていた。

汐子さんと親しかったのは初代会長の内海繁で、内海さんが六高、京大と雪山家の転地の軌道と共通していたし、共に歌人をめざしていたからであろう。

私が汐子さんを知ったのは、戦後の城ペン祭の文芸作品応募であった。5歳年上の汐子さんが短歌で受賞した2年後に私が詩で、更にもう2年後に妻が詩で受賞したから。

夫君の川口俊六は材木商を営んでいた。そんな関係で童話『三太の杉』が生まれた。モービル文学賞になった。『ロクの赤い馬』に続く作品である。地元の山々、義民が眠る石塔など、汐子さんが播磨に根づかれたことの証の物語だ。最晩年、奈良女高師付属小学校の師弟の縁が半世紀をへだてて、希有な再会を果たす交信をまとめた『あの夏、少年はいた』は、NHK放映で話題をよんだ。

姫路市教育委員長、播磨半どんの会々長など、俊六さんが急死、大学へ勤めるようになってから、汐子さんは滅法忙しい日々を送られてきた。いまま杖ついて「やってるの」と清らかなソプラノが響いてくるような気がする。

親友よ

澤村 祐司
こころねぶろぐ より



親友よ (8/1)

どうしてそんなに急いだのか。まだ、俺と一緒に音をぶつけあうはずだった。二人の姉の結婚式に出てくれて、二人で「次は俺らの番やな。競争」って言って、カラオケでアホみたいにラブソング熱唱して、お互いの結婚式では絶対に演奏しあうはずだった。

もう、月が変わってしまったから先月、四日連続で一緒に仕事させてもらったな。あなたの、こう、なんていうのか、柔らかなタッチで、空気を読むような十七絃だったから、俺が作った正調五木の子守唄がいい響きになった。

30日、リハの帰り、「自分疲れとんなあ、事故にあわんようにき一つけや」なんて言い残して、地下鉄を降りてった、その声も、そういえば疲れてたよ。

でもまさかその翌日になんて思わないじゃんか。

あああ、ただ呆然。失ったものが、ほんとに大きすぎる。でも、もう振り返ったらだめかいや、でも振り返って、少しの時間だけ泣かせてな。しばらくしたら、ちゃんと頑張るからさ。

30を待たずして旅立ってしまった親友 利根英法に、本当にありがとうをいって、心からのご冥福をお祈りします。

あああ、やっとな (8/3)

今はそんな言葉しか出てこないですが、箏曲家 利根英法を、最後の最後まで、送り届けてきましたよ。相変わらず悲しいけれど、どこかどこかほっとした気持ちもあります。

怒濤のような、長くて、重くて、泣きはらした4日間。昨日と今日は彼の故郷、播磨の相生に集まりました。彼のそばでろうそくの火をつなぎ、弔辞の文を遂行させ、尺八奏者 福田邦智と、棺の前で合奏し、語り合いました。久々に再会する人とは手をとるたびにこみ上げて、言葉を探して涙ばかりがあふれました。

けれど、昨日の通夜や今日の葬儀での演奏と、それから必死に語りかけた弔辞、どれかで絶対耐えられないと思ったのに、この時ばかりは涙なしでつとめられました。きっと、彼がそうさせてくれたんだろなって思いました。

お骨を拾い、参列した友人たちを見送り、私だけは帰るに帰れないから彼を実家に送り届けて、よくアホをして騒いだ二階の部屋をみたりして、はあ、やっとな新幹線で帰ってます。新神戸から書き始めたのに、あ、もう米原を過ぎたみたい。とりあえず、今日と明日くらいは、ぼーっとしてみようかな。改めて、昨日と今日、お会いできた全ての方々に、私からもありがとうをお伝えしたいです。

9/11(日)お昼 利根英法の思いを次いで、相生市で演奏します (8/30)

本当は利根さんが出演するはずだった舞台。でも、ご縁を頂いて、私が一曲出演させて頂くことになりました。

『みだれ』(八橋検校)私が一番大切にしている古典、今回は合奏形式。私は箏の替手を担当します。ああ、もうあの日から1ヶ月経ったなんて、はるか昔に感じますね。長かった、本当に長かった。初めて、「夏じゃない夏」でしたね。やっとな最近になって、彼との合奏記録を聴けるようになりました。いい記録も少しずつあるので、いずれyoutubeにも、アップしたいと思います。はあ、やっとなやっとな、楽器にも本気で(集中して)向かえるようになり、嘘じゃなく、弾いていると、ふっと左側に彼を感じたりします。本当に、背中がふうっと暑くなったり、「そりゃあ自分ちゃうやろー…」なんて、声が聴こえてくるような気がするんです。

そう、彼もきっと、自分が引き受けた舞台のことは本当に気になるはず。もっともっと弾き

たかったはず。だから私も、「大切に」とか「心を込めて」とか、そんな言葉では片付けたくないくらいの思いを、祈りながら、糸に乗せたいと思います。

あ、そうそう、皆様のお手元に、写真や思い出、そしてメッセージなどがありましたら、[こちら](#)で受け付けています！ 彼の HP は、まだまだ元気なんです！！ まだまだ更新されているんです！

あれ、筆不精な私も、彼のことになるかと乱筆してしまいますね。

そんな訳で私はまた相生で演奏致します。翌日は彼の誕生日だし、暫くは皆さんと一緒にいるつもりですよ。

今 思うこと



いま、おもうこと

大西 隆志

大変なことを始めましたね、と何度言われただろうか。多分にぼくのことを案じてくれる優しい思いのこもった言葉と受け取っている。自分自身の決意についてはあまり揺らぐことはなかったが、家族や友人には迷惑をかけているとは感じていた。産土である加古川の役所に勤めて39年も経っていたので、あと数年に迫った定年までおとなしく勤めていたら、ある意味において安泰に過ごせるとの保身の思いもなくはなかった。実は腰かけのつもりで就職したのに、そのまま長いこと腰を下ろしすぎて根が張ってしまったのかもしれない。最初に配属された職場が、当時は地方文化の殿堂とされた市民会館で、開設の準備から関わっていたこともあり、市役所らしくない仕事だったことも幸いしてか、ピッタリと嵌っていた。詩人の佐々木幹郎さんには、若い頃から「年金派詩人」と呼ばれては茶化されていたが、そこには安定志向に与することもなく、個の自由闊達を尊ぶ詩人の精神を失わないように、ある種の励ましをもらっていたように思う。これもお愛嬌のうちだったのに、齢五十半ばで古書店経営ということ始めてしまったのだ。

ぼくにとれば本と関わったり、囲まれたりしている環境が快適だったので、「本当に好きなこと」を選んだのかもしれない。本の読まれない時代になっていることもあり、小売業にとっては景気も芳しくはない逆風のなかで、乱暴な転身のように見えるようだ。生意気にもリスクを背負うことになる自立した仕事で、時代の風を直接に受けたいと思ったからだ、と強がりをつけているが、何か前に物事を進めるには、このような変化の時代には半歩だけにしても前へと歩みを進めることだ。定年後でも遅くはない、との助言ももらったが、五十代半ばのこの数年の時期が大切だと考えていた。かつて1970年代ぐらいまでは、定年は五十五歳だった。次なる人生のステップに入るには良い年齢で、精神的にも肉体的にもぎりぎりだと思っていた。ぼくのアイドルだった加古川出身の俳人永田耕衣さんの晩年の過ごし方に憧れていたこともあったからかもしれない。そして今年の5月4日から、「書肆風羅堂」と名乗った古書店で、「FOOL - A - DO」の風狂の姿勢で人と人の出会いの広場をモットーにして、「いま、ここ」を少しでも動かせればと考えている。